東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅱ　67: 245－253，2016.

乳幼児を持つ養育者にコモンセンス・ペアレンティング・プログラム短縮版を用いた子育て支援のポピュレーションアプローチの可能性

久保　恭子*1・宍戸　路佳*1・草間真由美*2・倉持　清美*3・後藤　恭一*4

生活科学分野

（2015年9月16日受理）

1．はじめに

わが国における子ども虐待の数は毎年増加しており，社会の関心も高い。現在，子育てをしている母親の背景を見ると，乳幼児の世話をした体験が極めて少なく，高学歴化，晩婚化，少子化が進む中で，母親はインターネットや雑誌から，必要以上に子育ての情報を入手し，力の限り子育てをしている傾向も否めない。また，子育て中の母親は長期間にわたって疲労感を持ち，心身ともに休むことができない，自分のための時間がないという育児負担を抱いている（服部他，2000，池田他，2001）という報告がある。さらに，母親の精神健康状態に関する先行研究をみると，約40％の子育て期の母親の精神健康状態が悪いと報告されている（及川他，2004）。近年，核家族化がすすみ，他人は他人，私は私と言った個人主義から，育児の悩みや相談を他者に求めることが少なくなり，このような個人主義，なれない育児という背景から，母親はストレスを強く感じ，自分と子どもとのやり取りを振り返り「あのときの子どもとのやり取りは適切ではなかったかもしれない」「もしかしたら虐待ママだったかも？」と必要以上に自分の養育態度に神経質になることもあるだろう。

子育て支援には行政の支援から地域の草の根運動など，さまざまな規模，方法がある。私たちは新潟県長岡市で，子どもの虐待防止活動を行っている。具体的な活動の内容は，電話やメイルによる子育て相談，子育て期の親支援としてノーバディーズ・パーフェクトやコモンセンス・ペアレンティング・プログラム（以下，CSP）を定期的に行っている。また，平成21年からは県内の小学校，中学校の教員を対象に子どもの虐待に関する知識の啓蒙活動，平成24年からは保育園・幼稚園の教員や養育者を対象にCSP短縮版を実施し，子ども虐待の理解と子どもの特性，子どもへの適切な関わり方について講義・演習を行ってきた。

今回，平成25年から26年度までに実施したCSP短縮版を受講した養育者を対象に行った質問紙調査の結果から，CSP短縮版のポピュレーションアプローチの可能性を分析したので報告する。

2．研究目的

乳幼児を持つ養育者に実施したCSP短縮版の評価を分析し，CSP短縮版が今後，子育て支援のポピュレーションアプローチとして使用が可能かを把握することである。

3．研究方法

3．1　研究方法

質問紙調査

3．2　調査対象者

新潟県長岡市と周辺地域。地域の保育園，幼稚園に子どもを預けている養育者1173人。

＊1　神奈川工科大学（243-0292　厚木市下荻野 1030）
＊2　子どもの虐待防止ネット・にいがた
＊3　東京学芸大学 生活科学講座 生活科学分野（184-8501　小金井市貫井北町 4-1-1）
＊4　航空環境研究センター（144-0041　大田区羽田空港 1-6-5）

３．３　調査期間

平成25年４月から平成27年２月まで

３．４　調査方法

保育園，幼稚園等にて，CSP短縮版を実施，終了後に質問紙調査を配布，回収した。また，一部の施設では，質問紙の回答に時間を与え，施設側で回収していただいた。

３．５　質問紙調査と分析方法

質問紙調査は長岡市の子育て支援課とNPO子どもの虐待防止ネット・にいがたのスタッフで作成をした。質問紙の内容は子どもの人数，年齢，養育者の年齢，子育てをしているときの気持ち，子育てに関する相談先（複数回答あり），研修会の感想，参加後の希望等（自由記述）であり，A4，１枚である。記入にあたり，10分程度の時間を要する。統計処理はSPSS20.0jを使用し，記述統計，子育て中の気持ちと相談相手，プログラム参加後の感想との関連はピアソンの相関係数，コレス分析を用いて分析した。自由記述の内容はKJ法を参考に類似した内容でまとめ，意味を圧縮した。

３．６　倫理的配慮

研究の内容，方法，危険性，予測される不利益，実験データの使途や公表方法について文書で説明する。また，自由意志での参加であることを説明する。さらに，本調査をお断りいただくこと，中断することによって，対象者に何らかの不利益がこうむることはないことを説明した。

３．７　CSP短縮版の実際の方法について

CSPは，アメリカで開発された「被虐待児の保護者支援」，ペアレンティングトレーニングのプログラムであり，暴力や暴言を使わずに子どもを育てる技術を親に伝えることで，虐待の予防や回復を目指すものである。内容は，子どもとの親密な関係を作っていく方法であり，子どもの望ましい行動を増やし問題行動を減らしていく，しつけの方法を学ぶという２つのステップからなる。経験的な学習を取り入れ，ビデオを使い，具体的な場面を見ながら関わり方のスキルを学ぶことができるものである。１回２時間，６回のセッションで行うものであり，教育的な色彩の強いプログラムである（岸田他，2006）。日本語版が作成された2005年より日本でも普及活動が始まり，プログラムを終了した保護者の約８割によい変化があったという報告がある（中坂他，2002）。今回は「子どもを怒鳴らない子育ての方法」と題して，子どものしつけの方法，暴言暴力を使わないしつけのスキルを身につける方法，母親自身の感情のコントロールの仕方，親子間の良好なコミュニケーションの方法をロールプレイなど用いて講義・演習した。参加費は無料，保育はついていない。場所は子どもの通う保育園で実施した。多くのケースが保護者会の前後に設定し，親が参加しやすいようにした。平成26年度は講義と演習あわせ１時間で実施したが，平成27年度は一部の施設で40分という短時間で実施したケースがあった。

４．結果

４．１　対象者の背景

質問紙の有効回答数1172であった。養育者の年齢はすべて女性で，21歳から73歳，平均35.3歳（±6.65）であった。20歳代が178人，30代が773人，40代が161人，50代が９人，それ以上が25人であった。子どもの数は１人から７人であり，平均2人（±0.78）であった。子どもが１人いる304人（25.9%），２人いる614人（52.4%），３人いる214人（18.3%），４人いる36人（3.1％），５人いる３人（0.3％），７人いる（0.1%）であった。

第１子の年齢は０歳から38歳，平均5.86歳（±3.51），第２子は０歳から33歳であり平均3.79歳（±3.22），第３子は０歳から20歳であり平均3.08歳（±2.85），第４子は０歳から８歳であり平均2.51歳（±2.11），第５子は１歳から４歳であり平均2.50歳（±1.29）であった。

第１子どもの年齢は０歳13人（1.1％），１歳42人（3.6%），２歳86人（7.4%），３歳155人（13.2%），４歳171人（14.6%），５歳175人（15%），６歳125人（10.7%），７歳105人（９%），８歳89人（7.6%），９歳55人（4.7%），10歳49人（4.2%），それ以上が105人であった。

第２子どもの年齢は０歳90人（10.4%），１歳111人（12.9%），２歳124人（14.4%），３歳122人（14.1%）４歳138人（16%），５歳113人（13.1%），６歳53人（6.17%），７歳25人（2.9%），８歳29人（3.4%），９歳12人（1.4%），10歳11人（1.3%），それ以上が70人であった。

第３子どもの年齢は，０歳36人（14.5％），1歳37人（14.9%），２歳41人（16.5%），３歳48人（19.3%），４歳33人（13.3%），５歳30人（12.0%），６歳８人（3.2%），それ以上が16人であった。

第４子どもの年齢は０歳８人（20.5％），１歳８人（20.5%），２歳４人（10.3%），３歳８人（20.5%），４歳３人（7.7%），５歳４人（150.3%），６歳３人（7.7%），

8歳1人（2.6%）であった。第5子の年齢は1歳，2歳，3歳，4歳が1人ずつであった。

4．2　対象者の子育て中の気持ち（複数回答あり）

子育ては楽しいことが多い273人（56.7%），子育ては苦しいこともあるが楽しいこともあるので何とかがんばれる891人（75.8%），子育ては苦しいことが多い31人（10.5%）。子育てはしたくない3人（1.1%），孤立感がある18人であった。

4．3　子育てに困ったときの相談相手について（複数回答あり）

保育園の先生473人（40.3%），学校の先生89人（7.6%），友人787人（67%），病院37人（3.1%），パートナー266人（77.4%），自分の親237人（20.2%），行政78人（6.6%）であった。

4．4　プログラム参加後の感想

プログラムが非常によかった539人，よかった509人，まあまあよかったが106人であり99%であった。参考にならなかった，どちらともいえないが12人いた。

4．5　プログラム参加後，実際にプログラムの活用希望

実際にプログラムを活用してみるが1110人(95.9%)であり，活用しないが2人，どちらともいえないが44人であった。

4．6　子育て感情・孤立感と相談相手，プログラム後の感想，活用との関連

祖母と思われるデータを除き，回答に欠損地がなく回答に矛盾のないデータのみ750人のデータを使って，上記に関する検定を行った。平成26年度はプログラムの時間を十分に確保できず，講義内容，演習が不十分であった園もあったため，平成25年のみのデータで分析した。

子育て感情（「子育てが楽しい」か「孤立感がある」）と相談相手，プログラム参加後の感想，プログラム活用の有無と関連があるか，相関分析を用いて検定した。結果，子育て感情がポジティブであっても，ネガティブであっても相談相手，プログラムの感想，活用の有無とで関連は見られなかった。

次に，子育て感情と相談相手について，コレスポンデンス分析を用いて検討した。コレスポンデンス分析の結果は布置（ふち）図として示される。関連の強いカテゴリーは近くに，弱いカテゴリーは遠くにプロットされる。布置図からは，「子育ては楽しいことが多いと感じている」人は自分のパートナーに相談しており，「子育ては苦しいこともあるが，楽しいこともあるのでなんとか頑張れる」という人は，個々によって相談相手がまちまちであり，特に誰に相談するといった特徴はなかった。「子育てはあまり楽しくなく，苦しいことが多い」と「現在，孤立感がある」と回答した人に特定の相談相手はいなかった（図1）。

4．7　母親の年齢と子育ての感情との関係

結果6と同様のデータを使って，母親の年齢と子育ての感情との関係をコレスポンデンス分析で分析した。30代の母親の子育て意識は「苦しいが楽しい」，40代は「楽しい」と答える傾向が高いことを示していた。一方，20代は特徴が見られなかった。（図2）

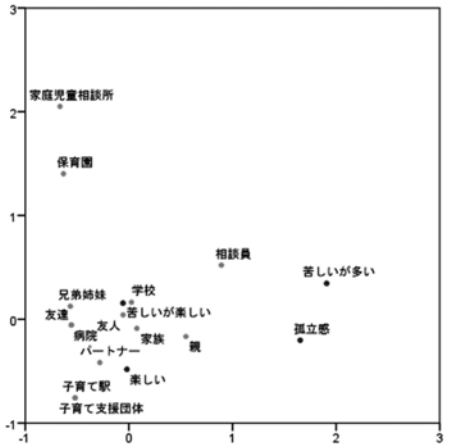

図1　子育て感情・孤立感と相談相手，プログラム後の感想，活用との関連

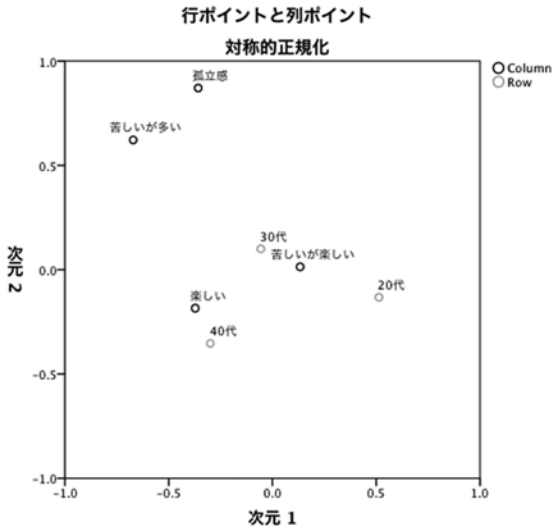

図2　母親の年齢と子育ての感情との関係

４．８　母親の年齢と相談相手の関係

同様に，母親の年齢と相談相手の関係をコレスポンデンス分析で分析した。20代の母親は（やや）「自分の親」を相談相手としていた。30代の母親は「友達」を，40代の母親は「保育園・学校の先生」を相談相手にしていることがわかった。一方,「自分のパートナー」はどの年齢とも特徴を示していなかった（図３）。

４．９　CSP短縮版に参加後の感想（自由記述）

KJ法を参考にして，参加者の意見を圧縮して明確化した。自由記述に回答したものは689人であった。自由記述の内容を文節で切り，類似した内容でまとめた（表１）。

カテゴリーは５つに分類され，参加者はCSP短縮版を受けて【自分の子育てを振り返り】，自分の子育てを，よりよい子育てにするためには【自分自身の感情コントロールの必要性】に気づき，現在の子育ての方法をより良いものに変化させようと，まず，自分のできることから行動していこうという意欲と，新しい方法ができるだろうかという【育児行動の変容への期待と不安】を抱いていた。また，このような変化を生じた原因として「演習やロールプレイがわかりやすかった」などの【ロールプレイや寸劇の効果】や「子どもを怒っているのが私だけではなく，少しほっとした」などの【他者との交流】が影響していた。

それぞれのカテゴリーについて説明をしていく。

1）自分の子育ての振り返り

このカテゴリーは，CSP短縮版をうけて，自分の子育てが「怒ってばかりいたなと気がついた」「反省すべき育児姿勢があったと気がついた」「（自分が子どもに出す指示が具体的ではなかったので）子どもがなぜ理解できないのかわかった」「叱られている子どもの気持ちがわかった」「私は虐待していたかも」など，自分の子育ての実際や方法，子ども理解の深まりが体験できていた。

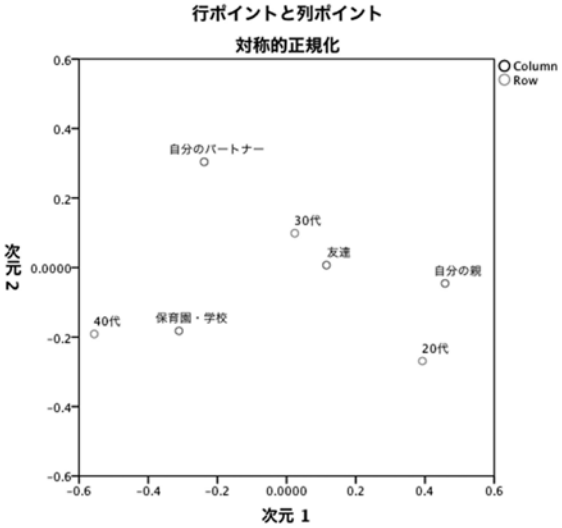

図３　母親の年齢と相談相手の関係

2）自分自身の感情コントロールの必要性

このカテゴリーは，親が子どもに指示を与えるとき，親自身が感情的に注意をするのではなく，「感情をコントロールしたい」「感情を言葉にしようと思う」「（自分が感情的にならないために）自分の時間を作ってみる」等，【自分自身の感情コントロールが必要】であることが語られていた。

3）育児行動の変容への期待と不安

このカテゴリーは，【自分の子育ての振り返り】をうけて，「（CSP短縮版で子育てに効果的な方法として理解したことを）実行してみたい」「やれることからやってみる」「もっと子どもをほめようと思う」など，自分自身の子育ての実際をよりよい子育て方法に変容しようとしていた。一方で「（子育てに効果的な方法として理解はしたものの）できないと思う」という意見もあった。

4）ロールプレイや寸劇の効果と他者との交流

CSP短縮版の中で，プログラムのよかった点などをみると，「トレーナーの話，演習，ロールプレイがわかりやすかった」「00劇場がわかりやすい（子どもと親とのよいやり取り，悪いやり取りを寸劇にしたもの）」「子どもを叱っているのは私だけではなく，少しほっとした」など，【ロールプレイや寸劇の効果】や【他者との交流】について語られていた。

４．10　CSP短縮版に関する養育者の希望について

自由記述にて，受講後，更なる希望，改善点等について記述された内容をまとめた。「あいまいな表現をもっと教えてもらいたい」「（時間が短く）駆け込みトークが聞きづらい」「子ども自身にクールダウンの方法を教えてほしい」「ざっくりした内容でわかりにくい」「子どもが小さくて，ゆっくり話が聞けなかった」「ロールプレイは苦手」「資料がわかりづらい」「上手なしかり方も教えてほしい」「夫，祖父母にも同じ内容を講義してほしい」があった。

表１　CSP短縮版に参加後の感想

自分と子どもへの気づき	自分の育児方法を振り返るいい機会だった 子ども理解が深まった	・怒ってばかりいたなと気がついた ・反省すべき育児姿勢があったときがついた ・叱られている子どもの気持ちがわかった ・子どもがなぜ、理解できないのかわかった
	私は虐待ママだったのかと不安	・私は虐待していたかも
自分自身の行動変容への期待と不安	実際にやってみようと思う	・教えてもらったことを実行したい ・やれることがからやってみる ・わかっていてもできなかった。もう一度、がんばってみたい ・２回目の参加ですが、まだできていないのでがんばりたい ・がんばり表なども使ってみたい ・簡単にできそうなことがたくさんあったので、早速やってみる ・子どもへの声のかけ方をわかりやすくする ・「片付けなさい」などを具体的に言ってあげる ・子どもが理解しやすい、わかりやすいコミュニケーションを心かげる ・もっと子どもをほめようと思う ・子どもがわかるようにほめようと思う ・子どもに〇をつけても×はつけないようにする ・子どものよいところを書き出してみる
	実際にできるかどうか、難しいと思う	・わかるけど、できないと思う
自分自身の感情コントロールの必要性	自分の気持ちを落ち着かせる必要性	・自分の時間を作ってみる ・自分の感情をコントロールしたい ・感性を言葉にしようと思う ・今日から子どもと落ち着いて向き合える気がする ・親自身が変化する必要がある ・自分の気持ちひとつで子育てが楽になりそう
プログラムの評価	効果的なプログラムであるという評価	・トレーナーの話が方が堅苦しくなくよかった、楽しかった ・トレーナーの話が確認をついていた、勉強になった ・トレーナーの話・演習、ロールプレイがわかりやすかった 00劇場がわかりやすい
	プログラムへの希望	・毎年やってほしい ・繰り返しやってほしい ・もっと詳しく聞きたい・もっとゆっくり聞きたい ・CSP希望をうけたい ・母親自身の行動変容の方法が知りたい ・夫・祖父母にもやってほしい ・保育園の先生にもやってほしい
		・あいまいな表現をもっと教えてもらいたい ・駆け込みトークが聞きづらい ・子ども自身にクールダウンの方法を教えてほしい ・ざっくりした内容でわかりにくい ・子どもが小さくて、ゆっくり話が聞けなかった ・ロールプレイは苦手 ・資料がわかりずらい ・上手なしかり方も教えてほしい
他者との交流	他者との交流がよかった	・子どもを怒っているのは私だけではなく、少しほっとした ・他のママと話ができてよかった

５．考察

CSPは虐待をしている親を対象に開発されたプログラムであるが，今回の自由記述の結果を見ると，広く一般的な子育て中の養育者にCSP短縮版を実施しても，よりよい子育てに向けて，養育者自身が内省し，できるところから自分自身の子育て方法を改善していこうという意欲がもてるプログラムであることがわかった。CSP短縮版が子育て支援のポピュレーションアプローチにも効果があるように推測できる。しかし，先行研究において，多くの子育て支援プログラムでは，客観的な評価ができていないことが報告されており（岸田，2006），今回の結果も，参加者の主観をまとめたものであり，今後，客観的な評価が必要となる。

今回の結果から，ロールプレイや寸劇などの，養育者自身が子どもとなることを体験して，子どもの気持ち，子どもの目線がわかり，具体的にどのようなしつけ方法，声かけが必要であるのかということが理解で

きており，他者との交流が養育者の気持ちをよりポジティブに変化させている。先行研究では，乳幼児をもつ親の育児支援に求めるものとして，情報交換やママ友ができること，でかけやすさ因子などが報告されている（久保他，2006）。このプログラムも通いなれた保育園にて無料で実施している点，ママ友との情報の交換ができており，親のニーズにマッチしている。一般的な育児支援では，親が育児から開放され息抜きができる，親も子どもも楽しめるなどの要素が求められているが，このプログラムには，そのような内容は含まれていない。本プログラムは，親の怒りのコントロールの必要性やロールプレイなどの演習を通して，子どもの目線になって，親の指示がどのように子どもに理解されていくのかを学ぶものであり，身近に存在しない子育て支援プログラムである。このようなプログラムを保育園等で紹介をしていくことは，養育者への啓蒙活動ともなり価値のあることと考える。

今回の調査から，新たな知見として，養育者の年齢が高いほど，子育てに前向きな姿勢がみられ，子育てを楽しむ傾向があった。40代の母親はこれから先，多くの子どもを生み続ける予定のあるものは少なく，自分の人生設計の中で「今は子育てを楽しむ時期」としている可能性もある。さらに，社会人経験もあり，20歳代に比べて，母親の心に余裕があるのかもしれない。40代の母親は相談相手として，育児の専門職者である保育士や教員をあげており，育児に必要な，かつ正確な情報を確保できるようになっている。一方，20代の母親の子育て意識は，各人がそれぞれ色々な想いを抱えていることがわかる。近年，特定妊婦[7]という言葉が使われるようになり，若い母親への支援の重要性が認識されている。今後の支援として，ポピュレーションアプローチから，ハイリスクアプローチへの移行としても，CSP短縮版を活用し，20代の母親の支援を手厚くしていく必要がある。

子育てにネガティブ感情をもち，孤立感を持つ養育者が52人おり，これらの人に特定の相談相手がいなかった。私たち支援者は子育てにネガティブ感情を持ち，孤立感があるような母親は保護者会等の参加がなく，子育て支援プログラムには参加しない，あるいは途中で帰宅するなどの傾向があるように推測する。しかし，今回の対象者はプログラムに最後まで参加し，自由記述では「CSPを取り入れた育児をしたい」と育児に前向きな意見が書かれている。「子育てが楽しくない，苦しい」というネガティブな言葉は発するには勇気が必要で，言い出しにくいものである。先行研究では，孤立感は不安や抑うつ傾向に影響をし，精神健康状態に悪影響を及ぼすことが報告されている（久保他，2013）。このような母親がどのようなサインを出しているのか，また，養育者の子育ての苦悩の具体的な内容，何が孤立感を高めるのかなど，より詳細なデータを集め，養育者の孤立感を軽減できるような支援を提供していく必要がある。今後の子育て支援プログラムの実施方法と課題として，CSP短縮版においては最低１時間程度の時間を確保すること，保育つきの講義・演習を計画すること，対象者を父親や祖父母や父親に広げ，広く一般的な知識として定着するように普及活動に努めることが必要である。

６．まとめ

本調査から，CSP短縮版の受講者の99％がプログラムは効果的であると評価しており，96％の養育者が実際の育児で活用すると回答していた。コレスポンデンス分析の結果，子育てを楽しんでいる人は夫婦関係がよく，孤立感のある養育者は特定の相談相手がいなかった。また，30代の母親は子育てを時に苦しいが楽しい，40代の母親は子育てが楽しいと答える傾向があり，20代は子育てにさまざまな思いを抱いていた。CSP短縮版は養育者に，ロールプレイや寸劇を使った演習を行うことで，自分の子育てを振り返る機会を与え，より良い子育てにするためには自分自身の感情コントロールが必要であることを教えていた。

孤立感を持つ母親は特定の相談相手がいないことがわかった。以上のことから，CSP短縮版が子育て支援のポピュレーションアプローチにも効果があるように推測できる。今後の支援として，CSP短縮版を活用しポピュレーションアプローチから，ハイリスクアプローチへの移行として，20代の母親の支援を手厚くしていく必要がある。子育てにネガティブ感情をもち，孤立感を持つ養育者を発見することは難しい。今後，養育者の子育ての苦悩の具体的な内容，何が孤立感を高めるのかなどを，より詳細なデータを集め，養育者の孤立感を軽減できるような支援を提供していく必要がある。

謝辞

本調査にご協力をいただいた皆様に深く感謝いたします。本研究はJSPS科研費26463433の助成を受けたものです。

引用文献

1 服部律子　中島律子（2000）；産褥早期から産後13ヶ月の母親の疲労に関する研究（第一報）．小児保健研究，59（6），663-668.

2 池田浩子（2001）；育児負担に関する研究 ―育児負担の時期別変化と母親の心理状態との関連．母性衛生，42（4），607-614.

3 及川裕子　久保恭子　刀根洋子（2004）；乳幼児をもつ親の精神健康状態 ―GHQとPBIの関連を通して―．日本ウーマンズヘルス学会誌，vo,l　379-386.

4 岸田泰子　田村毅　久保恭子他（2006）；育児支援プログラムに関する文献的検討. 東京学芸大紀要総合教育科学系，57，381-388.

5 中坂育美　竹前ルリ　野口啓二他（2002）；親へのアプローチプログラム，子どもの虐待とネグレクト，4（1），134-137.

6 久保恭子　及川裕子　刀根洋子　小田切房子（2006）：乳幼児の母親が育児サークルに求めているもの．共立女子短期大学看護学科起用第1号，97-101.

7 http://milky.geocities.jp/super_himazin_psychopath/article/Daiichihouki-Child-abuse.pdf#search=’%E7%89%B9%E5%AE%9A%E5%A6%8A%E5%A9%A6’ 2015年6月10日

8 久保恭子　後藤恭一　宍戸路佳他（2013）：新潟県中越地震災害が夫婦関係やストレス，子どものメンタルヘルスに与える影響．小児保健研究72（6），804-809.

乳幼児を持つ養育者にコモンセンス・ペアレンティング・プログラム短縮版を用いた子育て支援のポピュレーションアプローチの可能性

Possibilities of population approach where a shortened version of Common Sense Parenting (CSP) approach is applied to caregivers having infants and toddlers

久保　恭子*1・宍戸　路佳*1・草間真由美*2・倉持　清美*3・後藤　恭一*4

Kyoko KUBO, Mika SHISHIDO, Mayumi KUSAMA, Kiyomi KURAMOCHI and Kyoichi GOTO

生活科学分野

Abstract

Possibilities of population approach where a shortened version of Common Sense Parenting (CSP) approach is applied to caregivers having infants and toddlers

Purpose: This study aimed to analyze the evaluations obtained after the shortened version of CSP approach was implemented for caregivers having infants and toddlers, and discuss whether this CSP shortened version can be used as the population approach for child-rearing support.

Methods and Research Subjects: A questionnaire survey was conducted on 1173 caregivers living in and around Nagaoka city of Niigata prefecture.

Results and Considerations: This parenting program using the shortened version of CSP approach was evaluated as effective by 99% of the participants, and 96% of the participants answered that they would practically apply what they had learned from the program to their parenting manner. According to the correspondence analysis, caregivers enjoying child-rearing showed a good relationship with their partners, while caregivers feeling isolated were found to have no particular person to consult with. The caregivers in their thirties showed a typical tendency to spend a pleasant time although sometimes having difficult experiences in child-rearing; and those in their forties, to enjoy child-rearing. The caregivers in their twenties were found to have mixed feelings in child-rearing. Through the role play and short play, the CSP shortened version provided the caregivers with good opportunities to review their own way of child-rearing and taught them that they should control their own feelings for better child-rearing.

*1 Kanagawa Institute of Technology（1030 Shimo-Ogino, Atsugi-shi, Kanagawa, 243-0292, Japan）
*2 Noprofit Organization Canpi
*3 Tokyo Gakugei University（4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan）
*4 Aviation Environmental Research Center（1-6-5 Haneda-Kuuko, Ota-ku, Tokyo, 144-0041, Japan）

In light of the above, the CSP shortened version is considered to be effective as the population approach for child-rearing support. It is necessary to give more attention to support of the caregivers in their twenties by making the best use of the CSP shortened version prior to transition from the population approach to high-risk approach. There are many difficulties in detecting caregivers who are apt to negatively think about child-rearing and feel isolated. The child-rearing support is required to understand mothers' emotions and feelings more clearly by collecting more specific data of those caregivers, through interviews or the like, for example, what makes them distressed, what is the cause to increase their feelings of isolation, and what signs they show. Then, the child-rearing support should be provided so that the caregivers who are apt to be negative toward child-rearing can reduce their feelings of isolation.

Keywords: Common Sense Parenting (CSP) approach, population approach, high-risk approach, young caregivers, feeling of isolation

Department of Human Life Studies, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 目的：乳幼児を持つ養育者に実施したCSP短縮版の評価を分析し，CSP短縮版が今後，子育て支援のポピュレーションアプローチとして使用することが可能かを把握する。
研究方法：調査対象者：新潟県長岡市と周辺地域に在住する養育者1173人に質問紙調査を実施した。
結果・考察：参加者の99％がプログラムは効果的であると評価しており，96％の養育者が実際の育児で活用すると回答していた。コレスポンデンス分析の結果，子育てを楽しんでいる養育者は夫婦関係がよく，孤立感のある養育者は特定の相談相手がいなかった。また，30代の養育者は子育てを時に苦しいが楽しい，40代の養育者は子育てが楽しいと答える傾向があり，20代の養育者は子育てにさまざまな思いを抱いていた。CSP短縮版は養育者に，ロールプレイや寸劇を使った演習を行うことで，自分の子育てを振り返る機会を与え，より良い子育てにするためには自分自身の感情コントロールが必要であることを教えていた。
以上のことから，CSP短縮版が子育て支援のポピュレーションアプローチにも効果があるように推測できる。今後の支援として，ポピュレーションアプローチから，ハイリスクアプローチへの移行としてCSP短縮版を活用し，20代の養育者の支援を手厚くしていく必要がある。子育てにネガティブ感情をもち，孤立感を持つ養育者を発見することは難しい。今後，面談等を通してより，母親の気持ち，感情の状況を捉える努力が必要であり，このような養育者がどのようなサインを出しているのか，また，養育者の子育ての苦悩の具体的な内容，何が孤立感を高めるのかなどを，より詳細なデータを集め，養育者の孤立感を軽減できるような支援を提供していく必要がある。

キーワード: コモンセンス・ペアレンティング・プログラム，ポピュレーションアプローチ，ハイリスクアプローチ，若い養育者，孤立感